

上井手遺跡4次

上井手遺跡4次



日田市

日田市埋蔵文化財調査報告書第113集

2018年



日田市教育委員会

2018年
日田市教育委員会



調査地全体写真（南東から）



A区遺物出土状況（南東から）

序 文

この報告書は、当委員会が平成27年度に宅地造成工事に伴って実施した上井手遺跡4次の発掘調査内容をまとめたものです。

調査では、これまで日田市内で行われてきた遺跡の発掘では最多となる縄文土器や石器が出土し、調査地の近辺に大規模な集落が存在する可能性をうかがうことができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等に活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさまに、また、作業にご尽力いただきました作業員のみなさまに、心より厚くお礼を申し上げます。

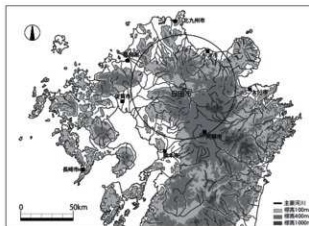
平成30年3月

日田市教育委員会

教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、宅地造成工事に先立ち、平成27年度に市教育委員会が実施した上井手遺跡4次の発掘調査報告書である。
2. 調査は宅地造成工事に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、事業者である有限会社宝珠開発、施工業者である有限会社松岡ガーデンにさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 発掘調査では、平面遺構実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施し、本書ではその成果品を使用した。
5. 本書に掲載した空中写真は、九州航空株式会社に委託して撮影を実施し、その成果品を使用した。
6. 調査現場での遺構実測の一部は財津真弓・森山敬一郎（発掘作業員）が行い、写真撮影は調査担当者が行った。
7. 本書に掲載した遺物実測図は、有限会社九州文化財リサーチに委託した成果品及び担当者が行ったものを使用した。また、遺構図及び遺物実測図の製図及び遺物写真撮影は担当者のほか、用松操（整理作業員）の協力を得た。
8. 挿入図の方位は第3図は真北、それ以外は磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
9. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿入番号に対応する。
10. 出土遺物および図面写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は、若杉が担当した。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

I 調査の経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘作業の経過	2
(3) 整理等作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の内容	4
(1) 調査の概要	4
(2) 遺構と遺物	4
IV 総括	19

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/5,000)	1	第10図 F区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)	10
第2図 調査区周辺地形図 (1/600)	2	第11図 出土遺物実測図 (1) (1/6)	12
第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3	第12図 出土遺物実測図 (2) (1/6)	13
第4図 調査区全体図 (1/300)	4	第13図 出土遺物実測図 (3) (1/6)	14
第5図 A区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)	5	第14図 出土遺物実測図 (4) (1/6)	15
第6図 B区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)	6	第15図 出土遺物実測図 (5) (1/6)	16
第7図 C区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)	7	第16図 出土遺物実測図 (6) (1/2・1/3・1/4)	17
第8図 D区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)	8	第17図 出土遺物実測図 (7) (1/2・1/3)	18
第9図 E区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)	9		

写真図版目次

巻頭写真図版上 調査地全体写真 (南東から)		④ B区遺物出土状況及び北壁土層堆積状況
下 A区遺物出土状況 (南東から)		⑤ B区西壁土層堆積状況
写真図版1上 調査地周辺空中写真 (西から)		⑥ C区遺物出土状況1 (北東から)
下 調査区垂直写真 (上が東)		⑦ C区遺物出土状況2
写真図版2 ① A区遺物出土状況1 (南西から)		⑧ C区北壁土層堆積状況
② A区遺物出土状況2 (北西から)	写真図版4	① C区西壁土層堆積状況1
③ A区遺物出土状況3		② C区西壁土層堆積状況2
④ A区遺物出土状況4		③ D区遺物出土状況 (北東から)
⑤ A区遺物出土状況5		④ D区西壁土層堆積状況
⑥ A区西壁土層堆積状況		⑤ D区北壁 (東側) 土層堆積状況
⑦ A区西壁土層堆積状況		⑥ E区遺物出土状況1 (南東から)
⑧ A区北壁土層堆積状況		⑦ E区遺物出土状況2
写真図版3 ① B区遺物出土状況1 (南西から)		⑧ F区遺物出土状況及び西壁土層堆積状況
② B区遺物出土状況2 (南西から)	写真図版5~7	出土遺物
③ B区遺物出土状況3		

表目次

本文写真目次		第1表 出土遺物観察表 (1)	20
写真1 機械作業風景	2	第2表 出土遺物観察表 (2)	21
写真2 発掘作業風景	2	第3表 出土遺物観察表 (3)	22
		第4表 出土遺物観察表 (4)	23

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成 27 年 3 月 23 日付けで有限会社宝珠開発より、大字日高取所 816-1 ほかでの宅地造成に伴う埋蔵文化財の所在の有無についての照会文書（事前審査番号 2014092）が提出された。この開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である上井手遺跡に該当し、平成 17 年には同じ場所で宅地造成に伴って、位置指定道路部分を対象に予備調査を実施し、多くの縄文土器や土偶などが出土していたことから、遺跡の存在は明らかになっていた（渡邊 2017・19 P 参考文献参照）。今回、照会を受けた事業では位置指定道路部分（延長約 100 m、幅 4.5 m）が平成 17 年度時点の計画に対して東側に約 10 m ずれていたことから、その範囲で遺跡の内容を確認することが必要と判断し、予備調査の実施等、その取扱いについて協議が必要な旨の文書回答を行った。

その後、予備調査の依頼文書が平成 27 年 4 月 10 日に提出され、同年 4 月 24 日に、位置指定道路を対象に予備調査を実施した。その結果、対象地のうち、北側では遺構・遺物は確認されなかったが、南側において地表より約 80～90 cm 下位より、暗褐色の粘質土を確認し、その層中より多くの縄文土器・石器が出土したことから遺跡の存在が明らかとなった。この結果により、道路南端から約 80 m 北までの間、遺跡が存在すると想定した。

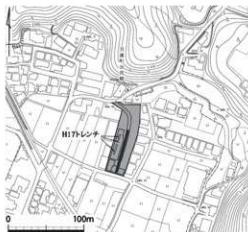
この事業予定地の造成は宅地部分は全面盛土工法であるものの、位置指定道路については下水道管の埋設に伴い掘削され、遺跡の保存が困難となる可能性があったため、発掘調査の実施に向けて、事業者と経費や期間について協議を行った。当初の計画における下水道管の埋設深度では、発掘の作業量が多くなり、それに伴い経費が多額になることは明らかであった。そこで下水道管の深度を浅くするように工法変更し、経費を抑えるとともに調査期間の短縮を図ることで事業者と協議を重ねた。その結果、下水管の埋設深度を当初予定より約 20 cm 浅くする工法変更を行ったことにより、遺跡の想定範囲の内、約 68 m 分を対象として、発掘調査を実施することとなった。

その後、平成 27 年 8 月 14 日に発掘調査実施の依頼を受け、同月 17 日付けで平成 27 年度から平成 29 年度まで 3 年にわたる発掘調査から報告書印刷までの協定書、平成 27 年度（契約期間平成 27 年 8 月 20 日～平成 28 年 3 月 31 日）の発掘調査に係る委託契約を取り交わした。また、後述するように、出土した遺物が大量であったため、平成 28 年度の整理作業に係る経費について、増額とする協定変更を行った。

なお、調査に関する組織については、次のとおりである。

平成 27 年度（発掘調査）平成 28 年度（整理等作業）平成 29 年度（報告書作成、印刷）

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	三笥眞治郎（日田市教育委員会教育長）
調査統括	柴尾健二（日田市教育庁文化財保護課課長／平成 27 年度） 池田寿生（同課長／平成 28 年度） 梶原康弘（同課長／平成 29 年度）
調査事務	園田恭一郎（日田市教育庁文化財保護課主幹（総括）／～平成 27 年 9 月） 古賀信一（同主幹（総括）／平成 27 年 10 月～） 行時桂子 渡邊隆行（同課主査）長祐一郎（同課主査／平成 28 年度～） 上原翔平（同課主任） 諫山温子（同課主任／平成 27 年度）



第1図 調査区位置図 (1/5,000)

調査・報告書担当 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主査）

発掘作業員 秋吉新六 小野昭信
小野ミユキ 河津モリ
北澤幾子 財津真弓
佐藤継信 佐藤洋子
宮木博幸 森山敬一郎
和田征二

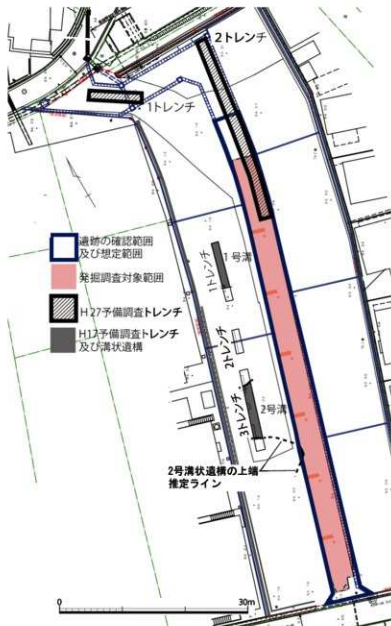
整理作業員 伊藤一美 高瀬真奈美
武石和美 立川幸子
用松操 吉田里美

（2）発掘作業の経過

現場での発掘作業の経過は次のとおりである。

- 8月31日 アスファルト剥ぎ開始
- 9月2日 重機による表土剥ぎ開始
- 9月3日 作業員による遺構検出開始
- 9月7日 掘下げ開始
- 10月9日 実測開始
- 10月16日 空中写真撮影実施
- 10月19日 掘下げ及び実測終了
- 機材整理
- 10月20日 機材撤収、調査終了

なお、調査区の南側では、湧水が激しかったことから、事業者の協力の下、電気設備を設置し、常時水中ポンプによる水抜きを行った。



第2図 調査地周辺地形図 (1/600)

（3）整理等作業の経過

出土遺物の整理作業は平成28年6月10日から平成29年2月16日まで行った。それとともに、平成29年2月10日～3月9日まで遺物実測の委託業務を実施、平成29年4月より平成30年1月まで担当者及び整理作業員による遺物実測・製図・写真撮影および遺構製図作業、報告書執筆・編集作業を実施し、印刷を行った。

出土遺物については、全ての水洗・注記を行ったが、遺物量が膨大なため、接合及び補強は最低限にとどめている。合わせて諸事情により、報告に必要と判断される遺物については、すべての実測及び掲載はしていない。また、時間的な制約から土器の実測図の調整表記は一部としており、残りは観察表に記載している。このほか、石器については、基本



写真1 機械作業風景



写真2 発掘作業風景

II 遺跡の位置と環境

上井手遺跡は市盆地東部、三隈川右岸の沖積地一帯に広がる遺跡で、三芳地区に該当する。この三芳地区は三隈川右岸の沖積地とその東側の元宮原台地、さらに東側の求来里川流域一帯に広がる地区である。三芳地区を中心に、上井手遺跡周辺の遺跡を概観する。

まず、三芳地区の北西側に田島地区との境をなすように会所山丘陵が東西に延びているが、この丘陵上には、古墳時代後期の円墳である鳥羽塚古墳(5)や横穴式石室を主体とする北向古墳(6)などが存在する。

この会所山丘陵の南東側にある独立丘陵上には1基の装飾古墳を含み7基の円墳からなる法恩寺山古墳群(2)が存在し、古代日田を治めた日下部氏の祖先の奥津城と推定されている。

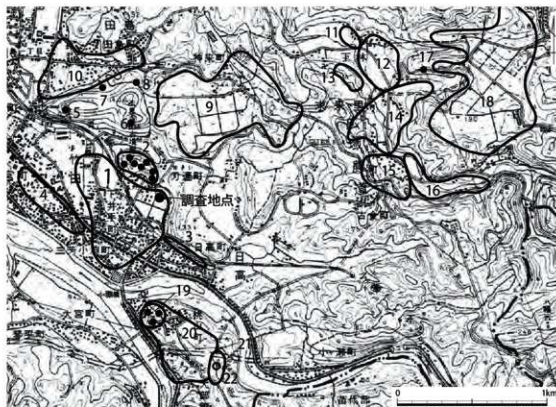
上井手遺跡の南東側には東寺横穴墓群(3)存在し、この付近にはJR久大線建設時に破壊されたとされるダンワラ古墳がある。

三隈川と大山川の合流地点の南東側に張り出した丘陵上にも遺跡が展開する。古墳時代前期の方形周溝墓や中世の塚が確認された牧原遺跡(21・22)や、円墳とみられる千人塚古墳群(19)などがある。また、千人塚古墳群を含む一帯は縄文時代の炉穴や集石、奈良時代の焼土坑などが確認された大部遺跡(20)に含まれる。

上井手遺跡北側の台地には、弥生時代から古墳時代の墓地や中世の塚が確認された元宮遺跡(9)が広がる。元宮遺跡の東側から南東側にかけて求来里川によって形成された谷筋には、縄文時代から近世に至るまでの集落や墓地が見つかった小西遺跡(11)・町ノ坪遺跡(12)・金田遺跡(13)・求来里平島遺跡(14)・名里遺跡(16)などが点在している。

上井手遺跡の西側の沖積微高地には、柳ノ本遺跡(4)が所在し、近年の調査で弥生時代から古墳時代に至る集落や墓地が確認されている。

(注) 各遺跡の詳細については、調査報告書等を参照されたい。



- 1 上井手遺跡
- 2 法恩寺山古墳群
- 3 東寺横穴墓群
- 4 柳ノ本遺跡
- 5 鳥羽塚古墳
- 6 北向古墳
- 7 後山古墳
- 8 田島古墳
- 9 元宮遺跡
- 10 会所宮遺跡
- 11 小西遺跡
- 12 町ノ坪遺跡
- 13 金田遺跡
- 14 求来里平島遺跡
- 15 着来遺跡
- 16 名里遺跡
- 17 亀ノ甲古墳
- 18 町野原遺跡
- 19 千人塚古墳群
- 20 大部遺跡
- 21 牧原千人塚
- 22 牧原遺跡

第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

III 調査の内容

(1) 調査の概要

調査地は、法恩寺山古墳群が存在する独立丘陵の南東側、標高 93～94 m の沖積面に位置する。調査の経過でも触れたが、調査は事業予定地内の幅 4.5 m の位置指定道路約 68 m、272㎡を対象として実施した。工事の掘削深度が南側は深く、北側が浅かったため、調査時に掘り下げる深さもそれに合わせることにし、調査区内の南側から 10 m を A～G 区に分け、A 区から G 区の各区毎で約 10 cm ずつ浅くなっている。掘り下げた深さは A 区が現地表面から約 1.4 m、G 区が約 0.8 m である。また、区名は遺物の取り上げに利用している。

調査は重機で遺物検出面上面まで掘り下げ、その後人力による遺構検出・掘り下げ作業を行った。その結果、多くの遺物が出土するとともに A 区南東隅と C 区西壁際において、溝状遺構の一部を確認することができた。なお、調査の方法としては、遺物包含層の調査と同様の方法で掘り下げを行った。また、遺物の取り上げ時には、大型の遺物を中心として図化したが、その他の遺物については図化は行わず、区名と 10～15 cm の幅で出土したレベルを記録した。

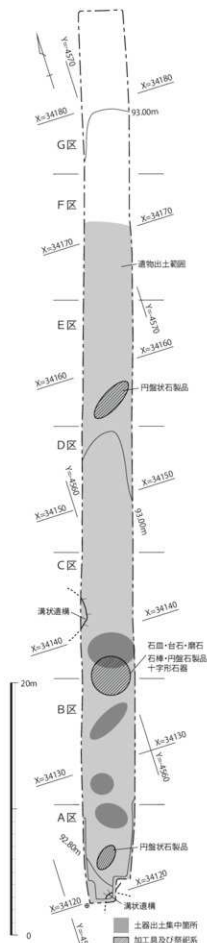
(2) 遺構と遺物

今回の調査では、溝状遺構の一部を確認できたのみであったが、後述するように遺物の出土状況から建物等、何らかの施設が存在したことも否定することができない。よってここでは、土層の堆積状況、遺物の出土状況及び出土遺物の分類等について述べていきたい。

1. 土層堆積状況 (第 5～10 図 図版 2～4)

まず、土層の堆積状況については、調査区 (A～F 区) の西壁及び A～D 区の北壁について、第 5～10 図に示した。各層の色調、土質等については、次のとおりである。このうち、堆積する 5 (a～d)・6 層が遺物を含む層である。また、5e 層が溝状遺構の掘り込み面と考えられ、6 層は溝状遺構の埋土でもある。その下位の 7 層以下からは遺物は出土していない。

- 1 a 層 灰褐色粘質土層 現代の造成土
- 1 b 層 灰橙褐色粘質土層 攪乱層
- 2 層 灰褐色粘質土層 しまりなし、造成時の盛土
- 3 層 灰茶褐色粘質土層 水田層
- 4 層 水田基盤土
- 5 a 層 灰褐色砂質土層 粒子細かい
- 5 b 層 明褐色砂質土層 しまりあり、粒子粗い、溝状遺構埋土
- 5 c 層 灰茶褐色砂質土層 しまりあり、粒子粗い
- 5 d 層 灰褐色砂質土層 粒子細かい
- 5 e 層 暗灰色砂質土層 しまりなし、溝状遺構の掘り込み面

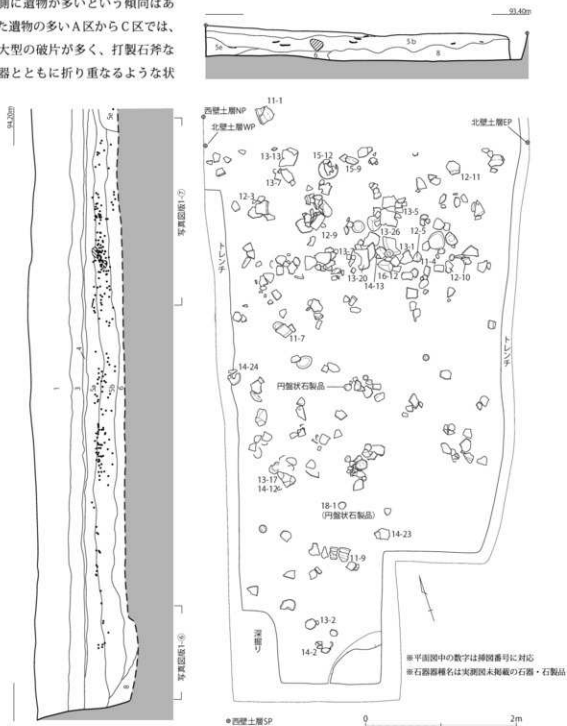


第 4 図 調査区全体図 (1/300)

- 6層 灰褐色砂質土層 しまりあり、粒子細かい、溝状遺構埋土
- 7層 暗灰黄色砂質土層 固くしまる、粒子細かい
- 8層 黄褐色粘質土層 遺構検出面（C区の落ち込み）
- 9層 灰黒色砂質土層 今回確認した最下層

2. 遺物出土状況（第5～10図 図版2～4）

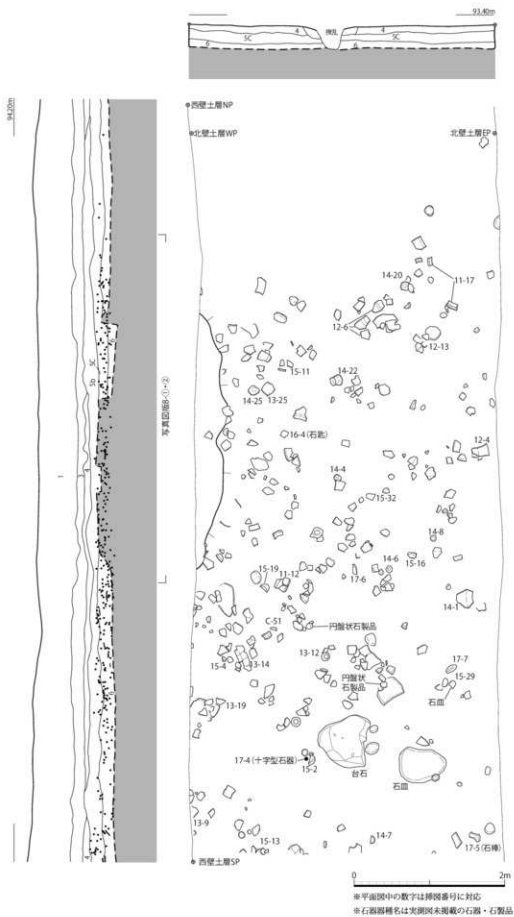
ここでは、遺物の出土状況について述べる、全体的には調査区南側のA区からC区が多く、D区、E区と北へ向かうにつれて、少なくなり、G区では出土しなかった。掘り下げた深さが南側の方が深いことを踏まえても、概ね南側に遺物が多いという傾向はある。また遺物の多いA区からC区では、土器は大型の破片が多く、打製石斧などの石器とともに折り重なるような状



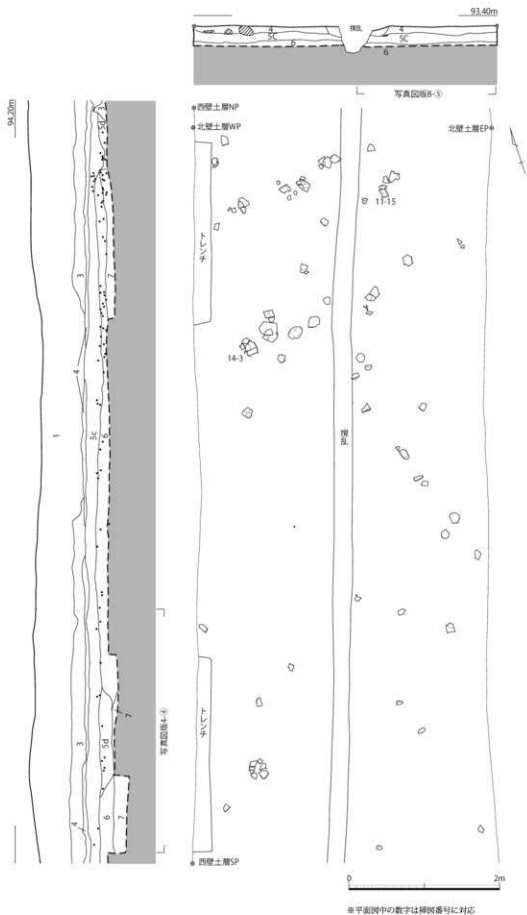
第5図 A区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）



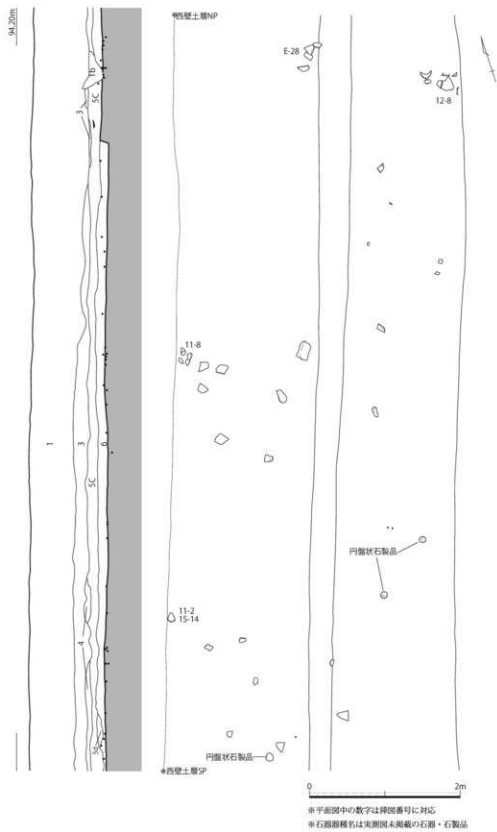
第6図 B区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)



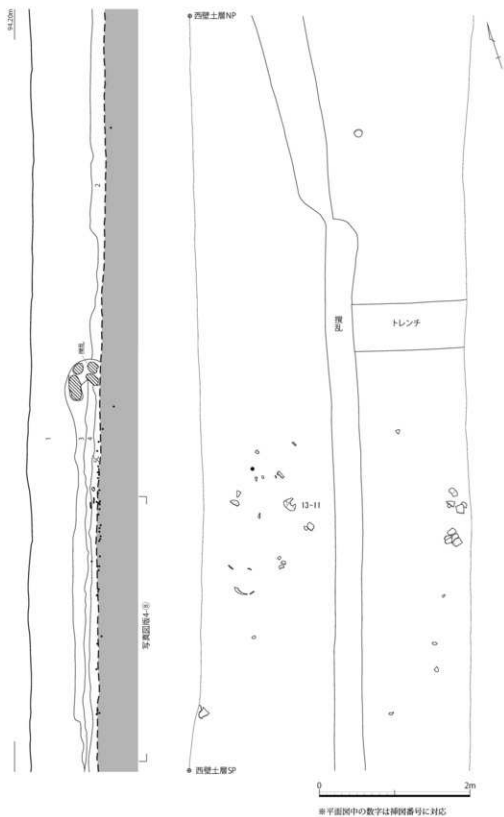
第7図 C区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)



第8図 D区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)



第9図 E区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)



第10図 F区遺物出土状況及び土層実測図 (1/50)

態で出土している状況から、大量の土器が繰り返し、廃棄されたものと考えられる。

以下、各区毎の遺物出土状況について述べる。

A区では南端で溝状遺構の上端とみられる高まりが確認され、これの埋土と考えられる5b層・6層から集中して遺物が出土した。平面的に見ると、遺物は北側に集中して出土しており、円盤状石製品が中央付近及び南側で見つかっている。

B区では5e層を境にして、ほとんどの遺物が6層から出土し、A区の出土層位と異なっている。遺物は南側及び中央付近で集中して出土し、その場所は大きく2か所に分けられる。また、B区北側からC区南側にかけては、台石・石皿・磨石などの加工工具が近い位置でまとまって出土している。

C区での土器の出土状況は溝状遺構の落ち込みにあたる部分までは多くが出土しているが、それより北側になると一気に出土量が減少する。出土した層位についてみると、溝状遺構の落ち込み部分を挟んで、南側では6層、北側では6層に加え、5c層から多くが出土している。また、祭祀系の遺物についても十字形石器や石棒がC区南側で出土している。

D区では北側で大型の破片が数点(第11図15・第14図3)出土しているものの、出土量は少ない。遺物が出土した層位は5c層や5d層で若干みられるものの、6層が中心である。

E区では北側で数点の大型の破片が出土している一方、南側で円盤状石製品が近い位置で出土していることが特徴として指摘できる。また、遺物は全て6層から出土している。

遺物の少ない状況はF区でも同様で、F区の中央付近を境に北側からは遺物は出土していない。遺物は5c層から出土している。

3. 出土遺物(第11～17図 図版5～7)

出土した遺物は、縄文土器後期の深鉢形土器が最も多く、次いで浅鉢形土器、そのほか高環形土器や注口土器なども出土している。遺物総点数は、破片数であるが、約10,200点である。

今回の報告で記述する土器の形式分類及び型式分類については、熊本県・ワクド石遺跡の発掘調査報告書に掲載されている分類を参考にし(古森1994・19P参考文献参照)、深鉢形・浅鉢形・椀形・高環形・注口形について記述する。

①深鉢形土器

1～3類に分類でき、それぞれワクド石遺跡報告書の分類における、A3類、A4類、B1類にあたる。

【1類】土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の4つの部分からなっているもので、頸部の先端を口縁部とし、水平になっているもの(第11図16・17)。

【2類】土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の4つの部分からなっているもので、口縁部が水平になり、口縁部の幅が広がるもの。頸部と口縁部の屈折の仕方によって二つに細分できる。頸部上端が外反し、口縁部が内傾または直立するものや頸部から単に折れ曲がるだけで、口縁部も真っ直ぐ外傾しているものがある(第11図1～15)。

【3類】土器が基本的に頸部、胴部、底部の3つの部分からなっているもので、頸部部がそのまま口縁部部として機能しているもので、水平な口縁部部のもの(第12・13図)。

②浅鉢形土器

1～5類に分類でき、それぞれワクド石遺跡報告書の分類における、B1類、B2類、C類、D類、E2類にあたる。

【1類】土器が基本的に口縁部と胴部と底部からなるもので、口縁部が外湾ぎみに直立するか、内側に傾いてい

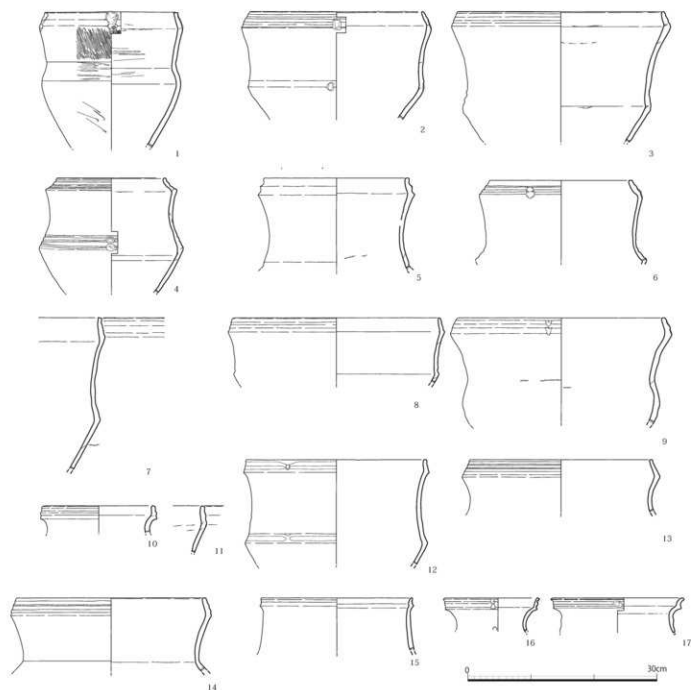
るもの（第15図5・6・23）。

【2類】土器が基本的に口縁部と胴部と底部からなるもので、口縁部が内湾して直立するか外反しているもの（第15図7・9・12・15・16）。

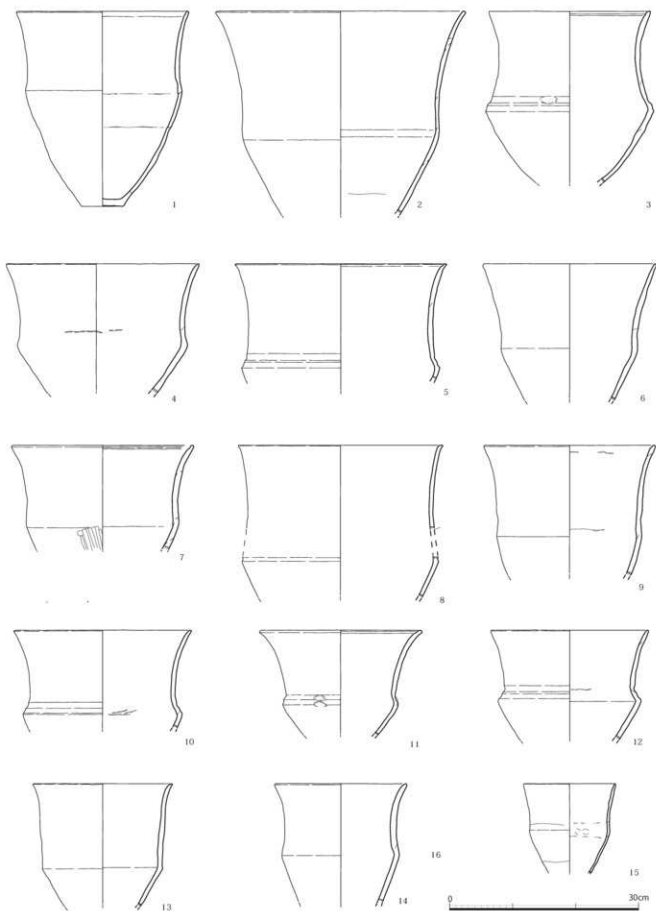
【3類】土器が基本的に頸部、胴部、底部から3つの部分からなっているもの。口縁部はなく、底部はいわゆる丸底で底部と胴部の境が明瞭でないもの（第15図3・22・27）。

【4類】土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の4つの部分からなっているもの。2類の胴部をさらに頸部と胴部に分けたような器形になっており、内湾しながら外反する頸部と口縁部が連続する特徴的な形をしている（第15図1・2・13・24）。

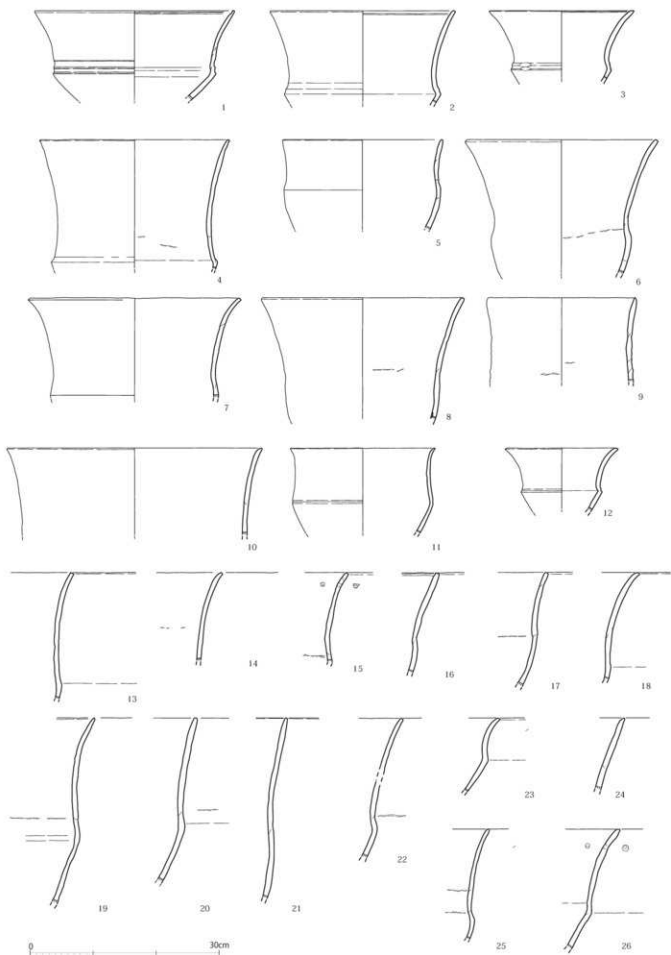
【5類】基本的にはD類と4つの部分は変わらないが、底部と胴部の境は明瞭でなく、いわゆる丸底の形状をしている。4類の口縁端部に4つの小さな山形突起を付けたもの。口縁部幅の器高に対する割合は小さい（第15図8・10・14）。



第11図 出土遺物実測図 (1) (1/6)



第12图 出土遺物実測図(2)(1/6)



第13图 出土遗物实测图(3)(1/6)

③椀形土器

1・2類に分類でき、それぞれワクド石遺跡報告書のA類とB類に当たる。基本的には胴部と底部からなり、胴端部がそのまま口縁端部になっている。

【1類】 底部と胴部の境が明瞭なものと明瞭でないものがある。境が明瞭なものは胴部が直立している（第15図28）。

【2類】 楕円形に板状の粘土を底部としており、その内側から胴部が立ち上がっており、底部が胴部より外にはみ出す形をしている（第15図29）。

④高環形土器（第15図30）

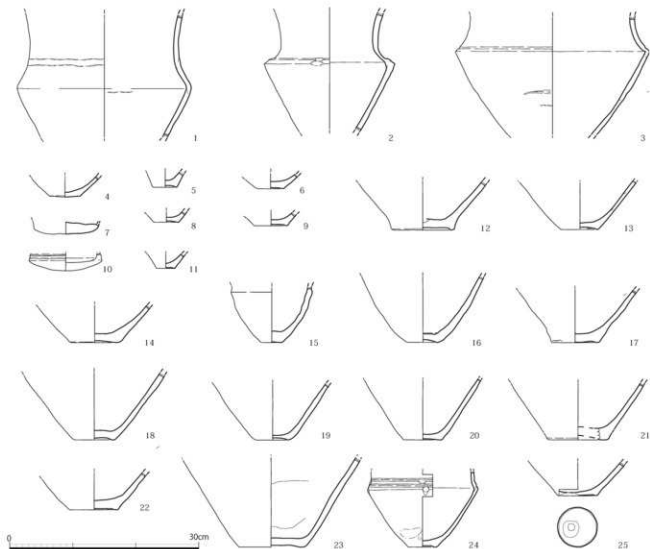
今回出土した土器は、脚部のみであり、分類は難しい。

⑤注口土器（第15図31）

注口部が1点のみの出土で、比較対象がないため、分類はできない。

以上の分類を基に、今回出土した土器形式の特徴についてまとめ、合わせて土器型式についても検討する。土器型式については島津氏・古森氏・水ノ江氏などの論考・報告を参考にした（19P・参考文献参照）。

今回出土した土器は約10,200点であるが、このうち、深鉢形土器が約8割を占める。そして浅鉢形土器は2割弱、その他の土器が数パーセントの出土量となっている。

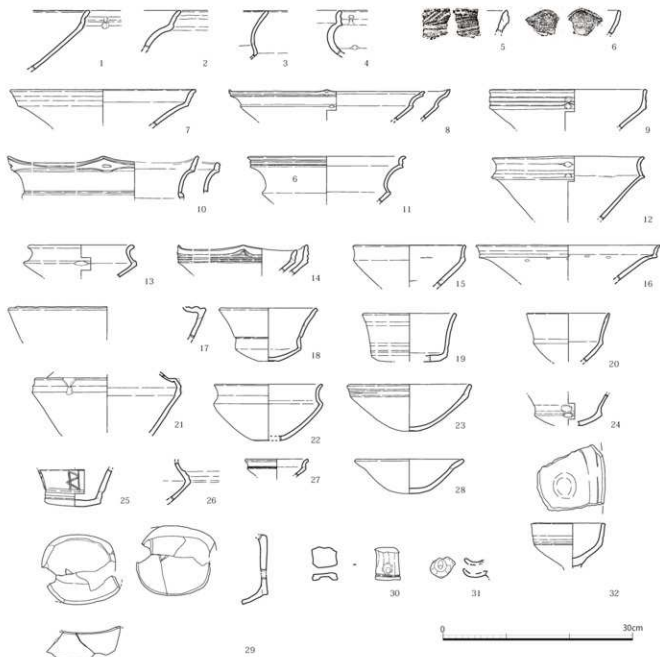


第14図 出土遺物実測図(4)(1/6)

深鉢形土器の傾向では、2類及び4類が大多数を占める。これ以外では1類、3類が少量ながら出土している。また、器面調整を見ると二枚目による貝殻条痕調整後に研磨やナデを施しているものが全体の90%と大多数を占めるが、研磨を施してしていないものも少なからず存在する（第13図10）。

型式についてみると、2類では、鳥居原式の特徴である口縁部に施された凹点文がみられるものがある。（第11図1・2・6・12・16）。また、2類の全てが端部を内傾させるものであり、鳥居原式から御領式のものと考えられる。3類では、凹点文が施されたものや（第12図3・11、第13図3）、胴部がやや丸みを帯びるもの（第13図6）などが鳥居原式のほかは、御領式に含まれよう。さらに1類は鳥居原式から御領式の範疇に収まるであろう。

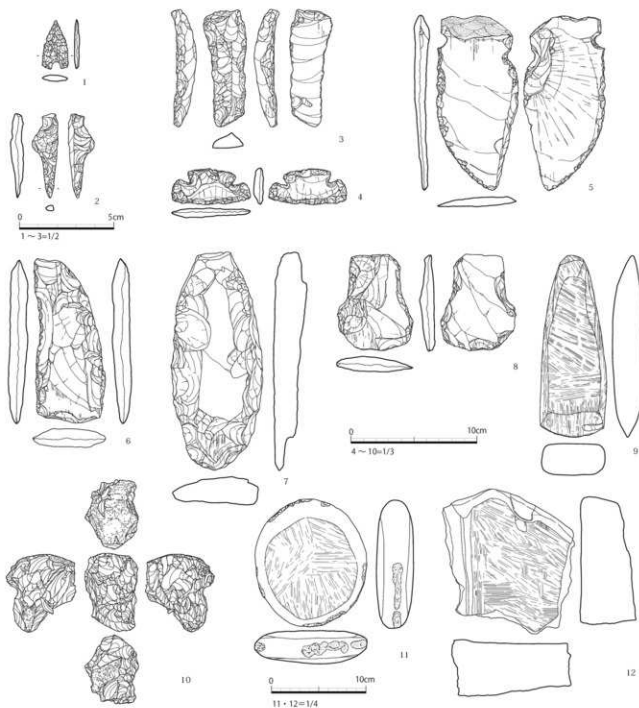
次に、浅鉢形土器に関しては、1類及び山形突起をもつ5類などが少量見られるほかは、2類、3類、4類が多く見られる。器面の調整や施文を見てみると、斜位の短沈線文を施すもの（第15図5）、凹線文を施すもの（同図6）や、2条の縦位の沈線の間に鋸歯状に沈線を施した精製の浅鉢形土器が見られる（同図25）。



第15図 出土遺物実測図 (5) (1/6)

土器型式についてみると1類が三万田式、2類・3類が三万田式から鳥居原式、5類が御領式の範疇に収まるであろう。

このほか少量ではあるが、椀形土器・高環形土器・注口土器が出土している。椀形土器は1類と板状の底部を持つ2類があり、鳥居原式から御領式のものと考えられる。高環形土器は脚部のみであり、分類が難しいが、三万田式から御領式、注口土器は注口のみ出土で体部形態などが不明なものの、三万田式から鳥居原式の範疇に収まるものと考えられる。



第16図 出土遺物実測図 (6) (1/2・1/3・1/4)

続いて、土器以外の遺物についてみていく。

石器は大量に出土したが、最も多かったのは打製石斧である(総数約450点、第16図6～8)。このほか、石核(第16図10)や大型の剥片(総数約20点、同図3)のほか、打製石鏃(総数約10点、同図1)、石錐(1点のみ、同図2)、石匙(総数2点、同図4・5)、磨製石斧(総数6点、同図9)、石皿(総数5点、同図12)、磨石(総数約10点、同図11)などの狩猟具や加工工具が中心に出土している。

また、祭祀に用いられたとみられる十字形石器(総数2点、第17図4)、円盤状石製品(総数11点、同図1)、石棒(同図5)、円盤状穿孔石製品(1点のみ、同図2)のほか、円盤状土製品(1点のみ、同図3)が出土している。

なお、ここまで記述してきた土器の形式毎の点数や割合、石器の器種毎の点数については概数であり、諸事情により十分な検討はできていない。よって、今後の詳細な検討によりその数量や割合が変動する可能性があることを記しておく。



第17図 出土遺物実測図(7) (1/2・1/3)

IV 総括

前章までに遺構・遺物とその時期について述べてきたが、ここでは、その傾向や性格について考えてみたい。

遺構は、溝状遺構の上端とみられる部分を一部検出したのみであった。それ以外については、建物などが存在する可能性が否定できないものの、明確に確認することができなかった。この溝状遺構については、平成17年度の予備調査3トレンチで確認された2号溝の一部であると考えられる(第2図)。この調査の結果と今回確認された上端の位置関係から、溝状遺構が延びる方向は一定ではなく、大きく蛇行していたものと考えられる。

遺物の出土状況では、出土した遺物の量が南側で最も多く、北側へ向かうにつれて、少なくなっている。また、これらの遺物は大型の破片が多いことや器面の摩耗が少ないことなどから、出土位置とは異なる場所からの流れ込みとは考えにくく、この場所に廃棄されたものがそのまま残っていたと考えられる。

こうした土器の平面的な出土状況と時期的な土器型式の傾向では、完形に近い土器のうち、鳥居原式(深鉢形土器2類)の土器はA区からE区でまんべんなく出土しているのに対し、鳥居原式(浅鉢形土器2類・4類)、御領式(深鉢形土器3類)の土器はA区からC区、調査区の南側で集中して出土しているという特徴がある。全ての遺物の検討を行っていないことから、断定は難しいものの、大まかな傾向として捉えておきたい。

さらに加工具である大型の台石や石皿がC区の南端に近い位置で出土している(第7図)。この位置に近いB区北側では、磨石(第16図11)も出土していることから、この付近は加工作業を行う場所、あるいは近隣の加工場所から廃棄された場所であったと想定される。

最後に祭祀系の遺物が出土した位置について検討する。第7図に示すように十字形石器や石棒、円盤状石製品の出土した位置がC区の台石と石皿を挟んで近い位置にある。また、A区の南側やE区の中央付近では複数の円盤状石製品が近い位置で出土しており、同時に廃棄された可能性と祭祀を行った場所であった可能性の両方を想定しておきたい。いずれにしても本調査地付近にこうした祭祀を行う大きな集落があったことは間違いのないだろう。また、平成17年度の予備調査では、本調査のC・D区に隣接する3トレンチの2号溝の埋土中から土偶が出土している。この遺構が今回の確認された溝状遺構と同じとすれば、本調査における遺物の出土状況から、A～C区周辺で、祭祀などが行われていたとする、予備調査時点での推測を裏付けているものと思われる。

以上、今回の調査では、遺物の出土状況から、本調査地あるいはその近隣に加工や祭祀を行う場所が存在していたことが判明した。それと同時に、土器については少量ながらも三万田式がみられるものの、鳥居原式から御領式を主体としており、縄文時代後期後半から末という比較的存続期間の短い集落があったと考えられる。このことから、本調査地周辺は縄文人にとって暮らし易く、この場所を様々な行為に利用する拠点的な集落が本調査地近辺に存在していたと想定され、過去の調査例と比較しても日田盆地の中でもかなり大きな集落の一つであったと考えられる。

(参考文献)

島津義昭「黒色磨研土器様式」『縄紋土器大観』第4巻 1994

古森政次「ワクド石遺跡」熊本県文化財調査報告第144集 熊本県教育委員会 1994

水ノ江和同「北部九州の縄紋後・晩期土器-三万田式から刻目突帯文土器の直前まで-」『縄文時代』第8号 縄文時代文化研究会 1997

渡邊隆行「上井手遺跡」平成28年度(2016年度)日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2017

第2表 出土遺物観察表(2)

探検番号	出土位置	種類	時期	品 類				調 査		出土 経路	色 調		備 考		
				目録	整理済	破損	調査	内容	内容		内容	備考			
第13001	A-22	陶文	Ⅲ	(14.0)	-	-	(14.3)	ナデ、二枚目内面による朱色調整後ナデ・ナデ	ナデ、二枚目内面による朱色調整後ナデ・ナデ	B-C-E	良好	紫褐色	2.53/2	褐色 褐色	内口2枚割 内縁下縁より 7.53/2/1 内縁内口による黒色化、 朱色化
第13002	A-46	陶文	Ⅲ	(28.4)	(29.8)	-	(14.7)	ナデ、一枚目による朱色調整後ナデ	二枚目による朱色調整後ナデ コ方角ナデナデ	A-C-E	良好	黄灰色	2.53/1	褐色	10/93/3 内縁上面打削面 内縁、内口2枚割
第13003	B-6	陶文	Ⅲ	(22.0)	(26.0)	-	-	一枚目による朱色調整後研 磨ナデ	ナデ、一枚目による朱色調整 後ナデ	A-C	良好	紫褐色	10/93/2	紫褐色	7.53/3/1 全縁に黒色化 内縁半割、磨削 内縁半割調整
第13004	B-79	陶文	Ⅲ	-	-	-	(29.0)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	ナデ、一枚目による朱色調整 後ナデコ方角ナデ	A-C	-	褐色	7.53/3/3	褐色	2.53/2/2 内縁半割、磨削、内縁内口 朱色化
第13005	A-25	陶文	Ⅲ	(23.0)	-	-	(14.3)	赤い顔料による朱色調整後 研ナデ	赤い顔料による朱色調整後 研ナデ	B-C-E-G	中々	紫褐色	2.53/3	紫褐色	10/93/1/1 内縁半割、上口入打削、 磨削半割、赤色化
第13006	B-64	陶文	Ⅲ	(30.0)	(32.2)	-	(21.3)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-C-E	良好	灰褐色	10/93/2/2	褐色	10/93/4/1 内縁、底面打削による黒 色化
第13007	A-33	陶文	Ⅲ	(33.0)	(36.7)	-	(13.9)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-C-E	良好	浅褐色	2.53/7/4	灰褐色	10/93/2/2 内縁一面打削面
第13008	B-31	陶文	Ⅲ	(31.4)	-	-	(19.3)	一枚目による朱色調整後ナ デ	一枚目による朱色調整後ナ デ	B-C	良好	黄褐色	2.53/5/3	紅い褐色	2.53/9/3 外縁一面打削面
第13009	B-32	陶文	Ⅲ	(32.3)	-	-	(13.5)	一枚目による朱色調整後ナ デ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-B-C-E	良好	紫褐色	2.53/9/3	褐色	10/93/2/1 内縁一面打削面
第13010	A-43	陶文 (形状)	Ⅲ	(30.8)	(30.8)	-	(20.7)	コ方角ナデ、一枚目による 朱色調整	コ方角ナデ、一枚目による 朱色調整	B-C-E-G	良好	紅い褐色	10/93/7/4	褐色	10/93/3/1 内縁全面より磨削面が 残存している
第13011	F-6	陶文	Ⅲ	(22.0)	(22.2)	-	(23.3)	ナデ 内縁ナデ(赤いナデ)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C-E	良好	黄灰色	2.53/4/1	褐色	7.53/6/3 内縁半割
第13012	C-29	陶文	Ⅲ	(18.0)	(12.8)	-	(19.1)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	ナデ、一枚目による朱色調整 後ナデコ方角ナデ	A-C-E-G	良好	紅い褐色	7.53/6/3	褐色	7.53/3/3/3
第13013	A-44	陶文	Ⅲ	-	-	-	(20.5)	一枚目による朱色調整後ナ デ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-C-E	良好	灰褐色	10/93/2/2	紅い褐色	2.53/9/3 内縁一面打削面による 黒色化
第13014	C-34	陶文	Ⅲ	-	-	-	(14.0)	コ方角ナデナデ、ナデ コ方角ナデ	コ方角ナデナデ、ナデ コ方角ナデ	A-C	良好	黄灰色	2.53/4/1	褐色	7.53/3/3/3 外縁下縁一枚目による 朱色調整半割面が残る
第13015	B-67	陶文	Ⅲ	-	-	-	(14.3)	研削、一枚目による朱色調整 後ナデ	ナデ、一枚目による朱色調整 後ナデ	A-B-C	良好	紅い褐色	7.53/6/3	褐色	7.53/3/3/3 外縁一面打削面による 磨削片あり
第13016	B-36	陶文	Ⅲ	-	-	-	(15.7)	ナデ	ナデ、一枚目による朱色調整 後ナデ	C-E	良好	黄灰色	2.53/3/1	オリーブ褐色	2.53/4/4 内縁一面打削面
第13017	A-78	陶文	Ⅲ	-	-	-	(18.1)	コ方角ナデ	一枚目による朱色調整後上 平口コ方角ナデ、下平口 コ方角ナデ	A-B-C-E	良好	褐色	10/93/4/4	褐色	7.53/6/3/3 内縁一面打削面
第13018	B-1	陶文	Ⅲ	-	-	-	(17.0)	一枚目による朱色調整後ナ デ(赤褐色)	一枚目による朱色調整後ナ デ(赤褐色)	A-C	良好	黄褐色	2.53/4/2	紅い褐色	10/93/2/2 内縁半割
第13019	C-18	陶文	Ⅲ	-	-	-	(26.5)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-C-E-G	中々	黄褐色	2.53/4/1	灰褐色	7.53/4/2/2 7.53/3/2/1 内縁半割
第13020	A-30	陶文	Ⅲ	-	-	-	(26.1)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-E	良好	紫褐色	2.53/3/3	褐色	10/93/3/3 10/93/6/3 内縁一面打削面
第13021	B-1	陶文	Ⅲ	-	-	-	(26.7)	一枚目による朱色調整後ナ デ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-B-C-E	良好	黄褐色	2.53/5/3	灰褐色	10/93/2/2 内縁一面打削面による 黒色化 内縁一面打削面
第13022	B-58	陶文	Ⅲ	-	-	-	(22.0)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C-E	良好	紅い褐色	10/93/3/3	灰褐色	2.53/6/2 内縁一面打削面
第13023	B-70	陶文	Ⅲ	-	-	-	(12.7)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後 ナデコ方角ナデ	A-B-C	良好	黄褐色	2.53/4/1	オリーブ褐色	2.53/4/6 内縁一面打削面
第13024	C-28	陶文	Ⅲ	-	-	-	(12.5)	コ方角ナデ	コ方角ナデ、一枚目による朱 色調整、ナデコ方角ナデ	A-B-C-E	良好	黄褐色	2.53/4/1	灰褐色	7.53/4/2/2 7.53/3/2/1 赤褐色調整、内縁半割
第13025	C-102	陶文	Ⅲ	-	-	-	(17.8)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C-E	良好	紅い褐色	10/93/7/3	紅い褐色	10/93/6/3 内縁一面打削面
第13026	A-24	陶文	Ⅲ	-	-	-	(19.9)	一枚目による朱色調整後研 磨ナデ	一枚目による朱色調整後研 磨ナデ	A-B-C	良好	紅い褐色	10/93/7/4	灰褐色	10/93/4/2 磨削片あり
第14001	C-44	陶文	Ⅲ	(27.0)	-	-	(19.7)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C	良好	紅い褐色	10/93/2/2	紅い褐色	10/93/4/2 内縁内口一面打削面
第14002	A-98	陶文	Ⅲ	(30.0)	-	-	(19.0)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C	良好	灰褐色	10/93/6/3	褐色	7.53/6/4 内縁一面打削面
第14003	D-26	陶文	Ⅲ	(30.0)	-	-	(18.0)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ、ナデコ方角ナ デ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-E	良好	灰褐色(一部 10/93/4/1)	10/93/2/2	紫褐色(一部 10/93/4/1)	53/92/1 53/93/1 内縁内口一面打削面
第14004	C-93	陶文	Ⅲ	-	-	-	(16.8)	ナデ	一枚目による朱色調整後研 磨ナデ	A-C	良好	紅い褐色	10/93/7/3	紅い褐色	10/93/4/1 一面打削面
第14005	C-54	陶文	Ⅲ	-	-	-	(17.2)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-C	良好	紅い褐色	10/93/4/4	紅い褐色	10/93/3/3 一面打削面
第14006	C-62	陶文	Ⅲ	-	-	-	(21.2)	ナデ	ナデ	A-C-E	良好	黄褐色	2.53/6/2	浅褐色	2.53/7/3 内縁一面打削面
第14007	C-3	陶文	Ⅲ	-	-	-	(19.9)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-C-E	良好	紅い褐色	10/93/2/2	褐色	10/93/6/3 内縁一面打削面
第14008	C-48	陶文	Ⅲ	-	-	-	(18.0)	ナデ	ナデ	A-C	良好	灰褐色	10/93/6/2	紅い褐色	7.53/6/3/3 内縁一面打削面
第14009	B-75	陶文	Ⅲ	-	-	-	(13.3)	ナデ	研削 褐色	A-C	良好	褐色	53/4/1	紅い褐色	10/93/4/3 内縁一面打削面
第14010	B-7	陶文 (形状)	Ⅲ	-	-	-	(22.8)	1枚目ナデ	内縁・ナデ・研削	A-C-E-G	良好	褐色	10/93/4/1	紅い褐色(一部 10/93/4/1)	10/93/4/2 10/93/4/1 内縁は欠損部での調整 内縁全面打削面による黒 色化
第14011	A-84	陶文	Ⅲ	-	-	-	(30.2)	研削	研削・ナデ	A-E	良好	黄褐色	10/93/5/3	紅い褐色	2.53/6/3 内縁一面打削面
第14012	B-78	陶文	Ⅲ	-	-	-	(9.2)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ・ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-C	良好	紅い褐色	7.53/6/3	褐色	7.53/6/3/3 内縁全面打削面による黒 色化
第14013	A-27	陶文	Ⅲ	-	-	-	(5.8)	灰上による黒色化、一枚目 による朱色調整後ナデ	灰上による黒色化、一枚目 による朱色調整後ナデ	A-C-G	1	良好	紅い褐色(一部 10/93/3/1)	紅い褐色(一部 10/93/3/1)	10/93/7/4 10/93/5/1 赤褐色調整 赤褐色調整
第14014	B-62	陶文	Ⅲ	-	-	-	(7.3)	一枚目による朱色調整後ナ デ・ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デ・ナデ	A-C-E	良好	紅い褐色	2.53/6/3	灰褐色	2.53/6/2 内縁一面打削面
第14015	E-7	陶文	Ⅲ	-	-	-	(10.0)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-B-C-E	良好	紅い褐色	10/93/5/3	灰褐色	10/93/3/3 内縁一面打削面
第14016	B-52/1	陶文	Ⅲ	-	-	-	(4.8)	一枚目による朱色調整後研 磨ナデ	一枚目による朱色調整後研 磨ナデ	A-B-C	良好	浅褐色	2.53/7/3	浅褐色	2.53/7/3 内縁一面打削面、底面 内縁半割
第14017	B-68	陶文	Ⅲ	-	-	-	(7.5)	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C	良好	紅い褐色	2.53/6/3	紅い褐色	7.53/6/3/3 内縁一面打削面
第14018	B-53	陶文	Ⅲ	-	-	-	(6.4)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デコ方角ナデ	A-B-C-E	良好	黄褐色	2.53/7/1	紅い褐色	7.53/6/4/1 内縁一面打削面
第14019	B-7	陶文	Ⅲ	-	-	-	(10.0)	ナデ	一枚目による朱色調整後ナ デ	A-C-E	良好	黄褐色	2.53/5/1	灰褐色	10/93/2/2 内縁全面より磨削面が 残存している
第14020	C-126	陶文	Ⅲ	-	-	-	(6.1)	一枚目による朱色調整 後ナデコ方角ナデ	磨削ナデ、一枚目による朱色 調整、コ方角ナデ(赤いナ デ)ナデ	C-E-G	良好	褐色(一部 10/93/4/1)	褐色	2.53/6/4/1 7.53/6/4/1 内縁全面より磨削面が 残存している	
第14021	B-2	陶文	Ⅲ	-	-	-	(10.0)	一枚目によるナデコ方角の朱 色調整	一枚目によるナデコ方角の朱 色調整	A-C-E	良好	紅い褐色	7.53/5/3	赤褐色	10/83/4 赤褐色調整

記号の意味はa、O、番号は、形状と彫刻を意味する。

出土：A(内口) B(底面) C(長尺) D(彩色) E(朱子) F(彩色) G(面) H(彫刻)

第4表 出土遺物観察表(4)

調査番号	出土位置	種類	品名	法量 (cm)			測定 値)	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
第16001	C	石器	打製石鏃	2.6	1.4	0.3	0.7	黒曜石	
第16002	A	石器	石鏃	4.4	1.4	0.3	2.3	ウツクノコ	古層底、発掘時に欠損。
第16003	B	石器	大形石鏃	6.2	2.2	0.8	11.8	黒曜石	
第16004	C95	石器	石鏃	3.8	6.2	0.7	11.5	燧石	自然磨丸し
第16005	B4	石器	磨製石鏃	13.8	6.4	0.7	97.8	ウツクノコ	両面磨は左右非対称
第16006	C64	石器	打製石鏃	13.0	5.6	1.4	120.0	燧石	断面は半楕に欠損。
第16007	G4	石器	打製石鏃	17.2	7.2	2.2	360.0	ウツクノコ	右側の半楕断面は発掘時のものか
第16008	C	石器	打製石鏃	7.6	6.0	1.2	51.9	ウツクノコ	片側の断面は磨化の可能性有
第16009	B15	石器	磨製石鏃	14.4	5.1	2.6	320.0	燧石	片側に発音筋有る
第16010	一級	石器	石鏃	6.2	5.4	4.0	130.0	黒曜石	裏面に発音筋有る。
第16011	B110	石器	磨石	13.4	11.8	3.5	940.0	燧石	断面に打痕有る
第16012	A100	石器	石鏃	15.0	14.2	6.1	1980.0	燧石	磨製の高さは2段にわたっている
第17001	A81	石製品	円盤状石製品	9.4	8.5	0.7	88.6	燧石	断面は断面加工
第17002	C	石製品	穿孔円盤状石製品	7.6	7.9	2.0	87.0	燧石	穿孔は両側穿孔
第17003	A	土製品	円盤状土製品	5.5	5.4	0.7	63.3	-	表面は「字」十字 断面：角閃石・頁石・白雲母・ 角闪石・黒雲母、鉄燧石・磁石
第17004	C14	石器	十字形石鏃	6.7	6.8	0.8	40.0	燧石	片側の断面磨有
第17005	C1	石器	石鏃	15.3	11.0	8.5	1500.0	燧石	磨り面がみられる



調査地周辺空中写真（西から） ※白丸が調査地、北側は法恩寺山古墳群がある独立丘陵。



調査区垂直写真（上が東）

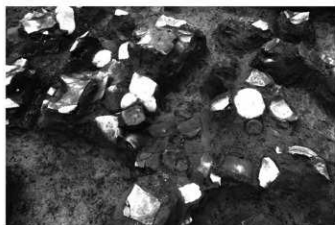
写真図版 2



① A区遺物出土状況1 (南西から)



② A区遺物出土状況2 (北西から)



③ A区遺物出土状況3



④ A区遺物出土状況4



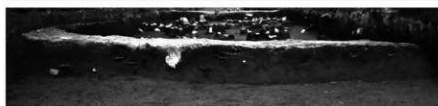
⑤ A区遺物出土状況5



⑥ A区西壁土層堆積状況



⑦ A区西壁土層堆積状況



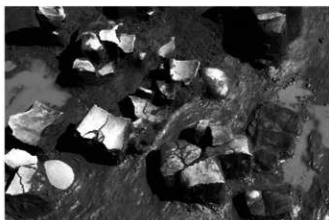
⑧ A区北壁土層堆積状況



① B区遺物出土状況 1 (南西から)



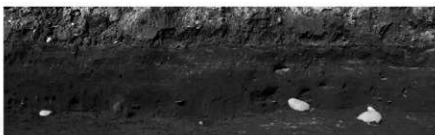
② B区遺物出土状況 2 (南西から)



③ B区遺物出土状況 3



④ B区遺物出土状況及び北壁土層堆積状況



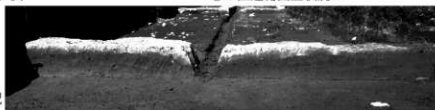
⑤ B区西壁土層堆積状況



⑥ C区遺物出土状況 1 (北東から)



⑦ C区遺物出土状況 2



⑧ C区北壁土層堆積状況



①C区西壁土層堆積状況1



②C区西壁土層堆積状況2



③D区遺物出土状況(北東から)



④D区西壁土層堆積状況



⑤D区北壁(東側)土層堆積状況①



⑥E区遺物出土状況1(南東から)



⑦E区遺物出土状況2



⑧F区遺物出土状況及び西壁土層堆積状況





14-20



14-23



14-24



14-25



15-2



15-5



15-6



15-10



15-12



15-13



15-18



15-23



15-24



15-25



15-29



15-30



15-31



15-32



報告書抄録

ふりがな	かみいでいせき4じ
書名	上井手遺跡4次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第133集
編著者名	若杉 竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2018年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみいでいせき 上井手遺跡 4次	おおいけんどたし 大分県日田市 おおまごろなか 大字日高	44204-6	204162	33° 18' 29"	130° 57' 3"	20150901 ～ 20151020	272㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上井手遺跡 4次	集落	縄文時代	溝状遺構	縄文土器 石器 石製品 土製品	加工場所や祭祀場所の 存在が想定され、その 周辺に廃棄されたと考え られる大量の縄文土 器が出土

要約	遺跡は日田盆地東部の三隈川右岸の沖積地に広がる。調査では縄文時代後期後半から末にかけての大量の縄文土器が出土した。これらの土器は大型の破片が多く、器面ほとんどが摩耗していないことから、周辺からの流れ込みによるものでなく、この場所に廃棄されたものと考えられる。また、台石や石皿などの大型石器、十字形石器や石棒などの祭祀系遺物が近い位置が出土していることから、加工作業場所や祭祀場所が存在していた可能性がある。こうしたことから、この場所を様々な行為に利用してきた人々の拠点的な集落が調査地近辺に存在することが想定され、この集落は過去の調査例と比較しても当時の日田盆地の中でも大きな集落の一つであったと考えられる。
----	--

上井手遺跡4次

日田市埋蔵文化財調査報告書第133集

2018年3月22日

編集 日田市教育庁 文化財保護課

877-8601 大分県日田市田島2-6-1

発行 日田市教育委員会

877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 インデバイス

877-0076 大分県日田市亀川町848-1